**斎藤 日出於 （さいとう・ひでお）**

**１、プロフィール**

　俳人。高校教諭。昭和33年頃から句作を始める。闘病に苦しみながら、句誌「草苑」などで活躍し、49年６月「渋柿（のち渋柿園）」を創刊し主宰した。

＜生没＞

1923（大正12）年２月５日～1980（昭和55）年２月28日

＜代表作＞

斎藤日出於遺句集 『夕椿』

勝鶏のまだ眼の険し夕椿　草笛のための一葉えらびとり

＜青森との関わり＞

弘前市出身。弘前高等学校、弘前工業高等学校教諭。職場で句会活動を始め句作と俳句普及に努めた。

**２、作家解説**

大正12年２月５日、弘前市袋町59番地に生まれる。本名、旭夫（ひでを）。弘前市立城西小学校を経て昭和10年４月、弘前中学校へ入学。15年３月卒業。16年４月、盛岡高等工業学校入学。18年９月、戦時による繰上げ卒業で日立航空機会社入社。10月から20年９月まで旧海軍の軍務に服した。

戦後22年４月、弘前市立第二中学校教諭。24年４月東京理科大学二部数学科第三学年に編入。26年３月卒業。４月弘前高等学校教諭となる。33年５月、弘高句会を開催し、句会幹事となる。35年10月鏡陵句会と呼称する。

37年頃より、心房細動の症候を感じ、以後生涯を通じて心房細動に起因する血栓症などを患い、弘前大学病院、小野病院に断続して入退院する。44年１月「夏草」、４月「十和田」に入会。10月、増田手古奈の勧めで、俳号を「日出於」と改める。雑誌「俳句」雑詠に投句を始めた。45年４月「草苑」、続いて「蘭」に入会。

48年４月、弘前工業高等学校に転任。ここでも職場句会に努める。49年６月、「渋柿」を創刊し、安田汀四郎を選者にむかえる。53年１月、「渋柿」を「渋柿園」に改題。７月、５周年記念号を発行。８月、東奥日報社主催、県俳句大会で第一席となる。

55年１月、身体不調を訴え、２月心不全症状のため臥床し、28日小野病院に入院。29日朝、心筋梗塞のため急逝した。享年57。「渋柿園」４月号が追悼号を編む。

56年１月、『斎藤日出於遺句集 夕椿』を刊行委員会が発刊する。

**３、資料紹介**

〇『斎藤日出於遺句集 夕椿』

図書

1981（昭和56）年１月20日

作者の死後、「渋柿園」同人を中心とする刊行委員会によって編集・発行された。句帳に記されていた約4000句から536句を所収。集名は「勝鶏のまだ眼の険し夕椿」から採られた。「草苑」主宰、桂信子が序文を寄せている。